「声を聴くということについて」

「鹿児島の近現代」教育研究センター　特任助教　日髙 優介

「私もう、本当に怖かったんです」

2018年の秋、奄美大島の宇検村で50年前の住民運動についての聞き取り調査をおこなった。「枝手久闘争」と呼ばれるこの住民運動は、村がある焼内湾の半分を埋立て、大規模な石油基地を誘致するという計画をめぐる対立だ。この計画は、村内を賛否に二分しただけでなく、集落内も、そして家族内においても立場を分けた。冒頭の語りは石油基地誘致の賛成派に立った女性の声である。彼女の「怖い」は、人口減少に伴う村の将来についての恐れであり、そして連日抗議活動を続ける反対派に対するものであった。

「己の不幸や悲しみ、失敗を自ら語りたがる人は少ない。けれど何かのきっかけで一気に言葉が溢れ出すことがあった。誰かに、何かを話したい。聞いても

らいたい。そんな思いは多くの人の心底に眠っている」――――清水潔『鉄路の果てに』（2020）

私が訪ね、調査の意図を伝えたとき、彼女は強い声で「聞いて下さい」と言った。彼女が私のために椅子を引いた光景が印象深く記憶に残っている。この50年間彼女たち賛成派の声を聴く人はいなかった。「テレビも新聞も私たちの本当のことを伝えてくれなかった」と彼女は続けた。「公害」が社会問題として大きく取り上げられた当時、公害の原因となりうる石油基地を誘致しようとしていた賛成派の人々に「金に目がくらんだ愚か者」というレッテルを貼られたことを想像することは難くない。乳飲み子を抱えていた彼女は、将来子が村を出て行くことを恐れたこと、そして、反対派の街宣のスピーカーに眠る子が泣き声をあげる事態を恐れたことを語った。

時が流れた。住民運動は沈静化し、企業も進出を撤回した。鬼籍に入った関係者も多い。村内の対立も私が調査した頃には解消されつつある状況が確認できた。それでも、彼女のなかには強い声で「聞いて下さい」というメッセージが残されていた。

近年インタビューを基軸とした「生活史」や「ライフヒストリー」「ライフストーリー」「オーラルヒストリー」と呼ばれる、人々の語りに耳を傾ける調査手法が重要性を増している。私が専門とする社会学だけでなく、文化人類学や民俗学などの社会科学、人文科学という所謂「文系」の学問においてインタビュー調査は重要な社会調査法だ。もちろん、統計調査などの量的調査も優位性があることは認めるが、多様な現代社会においては、人々の声に耳を傾けることに社会の有り様を捉える手がかりがあると考える。

金菱清らによる東日本大震災の震災体験の聞き取りや、岸政彦らによる『東京の生活史』（2021）、『沖縄の生活史』（2023）のプロジェクトはこの流れの代表的なものであると考える。本学が位置する鹿児島県においても鹿児島国際大学の民俗学者ジェフリー・アイリッシュらによる『ライフ・トーク――学生たちと歩いて聞いた坂之上の35名』（2015）といった取り組みがある。これらの取り組みからは、当該事象や当該社会の様子が実感を持って立ち現れている。

今年、私が担当する講義「地域コミュニティ論」において、1993年の鹿児島の「8.6水害」についての聞き取りを学生と取り組んだ。死者行方不明者49名、460軒以上の家屋の全半壊の被害を出したこの豪雨災害では、江戸時代に作られた三つの石橋も流失した。

60名以上の学生が、この災害にあった50名以上の人々にインタビューをおこなった。この内容を「8・6の雨音――8・6水害についての55人のインタビュー」としてまとめた。

多くが二十歳前後の学生たちは、当然この30年前の水害を体験していない。それでも、彼／彼女たちは実に真摯に丁寧にこれに取り組み人々の語りを受け取った。親や祖父母、バイト先の同僚、仲の良いお弁当屋さん、道を歩いていた人などから話を伺い、同時にそれらの人々「自身」と人々が生きる「社会」と「時代」を理解することに繋がったと考える。

夜の仕事をしていて子どもを保育所に預けていた女性の不安。翌日新装開店するパチンコ屋が気になっていた男性。帰宅する手段を失い夜中繁華街を歩いた専門学校生。慎重に迂回しながら乗客を送り届けたバスの運転手。これらの人々の「記憶」について「記録」からは把握することができない。

同時に、これらの語りからは現代社会における課題についても読み取ることができる。「経験しないと分かんないですよね」という女性の問いかけからは、災害の伝承性についての課題を捉えることができる。「皆で力を合わせた」というエピソードからは人々の連帯について考えさせられる。また、複数の人から「ビルの地下で亡くなった知り合いの話」が語られたが、人々にとっての印象的な記憶とともに、可視化されにくい社会関係についての検討の余地が認められる。

そして、最も重要なこととして人々の語りたいという思いがそこにある。ある学生は高齢の方から「もう記憶がなくなるからこのようなインタビューで思い出すことができて、うれしい。記憶を残しておかないと」と言われた。この話をきいたとき、本文の冒頭で示した賛成派の女性の「聞いて下さい」という私自身の経験を思い出した。日々は過ぎていく。そのような日々において「記憶」もまた埋没する。清水は人々の語りについて「何かのきっかけで一気に言葉が溢れ出す」と表現した。生活史を収集するプロジェクトはこの「きっかけ」として機能すると考える。

そして、これは単にエピソードを聞いたということだけに留まらない。インタビューにおいては社会的相互作用がおこなわれている。インタビュアーである学生とインタビュイーである回答者の間のコミュニケーションの帰結がインタビューの成果である。8・6水害を経験したことがある大学教員であり社会学者である私がインタビューした場合と、8・6水害を経験したことのない若い学生がインタビューした場合では、もしかしたら異なるインタビューの成果が出てくるかもしれない。このように考えた場合、インタビューにおいて社会的相互作用がおこなわれていることが理解しやすいのではないだろうか。そのため、本プロジェクトのインタビューを通して学生と回答者の双方にそれぞれ変化を及ぼしたと考える。

そしてまた、社会的相互作用は文章と読者の間においてもおこなわれる。皆さんがこのインタビュー集を読まれた際、どのように感じたか、考えたかについて、声を聴かせていただきたい。皆さんの声もまた、この社会を捉える手がかりになると考える。

（インタビュー集は近現代センターのウェブサイトで見ることができます。また、書籍版の刊行を予定しています。）

参考文献

有末賢、2000、「生活史調査の意味論」『法學研究：法律・政治・社会』73 (5), 1–27.

石原昌家・岸政彦監修、沖縄タイムス社編、2023、『沖縄の生活史』みすず書房.

日髙優介・桑原司、2020、「石油基地誘致反対運動のネットワーク的展開：奄美大島宇検村を事例に」『経済学論集』95: 105–124.

ジェフリー・S・アイリッシュ／橋口博幸、『ライフ・トーク――学生たちと歩いて聞いた坂之上の35名』南方新社.

金菱清 編、2016、『呼び覚まされる 霊性の震災学――3・11 生と死のはざまで』新曜社.

金菱清編、2018（＝2021）、『私の夢まで、会いに来てくれた――3・11 亡き人とのそれから』朝日新聞出版.

岸政彦編、2021、『東京の生活史』筑摩書房.

清水潔、2020、『鉄路の果てに』マガジンハウス.